

編集室から

4月号の発行が遅れてしまいました。

毎号表紙写真を選ぶのに、前年同月のアルバムちを見ているのですが、今年は桜の開花が昨年よりもかなり遅いようです。先月も寒い日ばかりでしたし、4月になっても気温が上がらない日が続いています。そうかと思えば、急に暖かくなる日もあり、注意しないと体調を崩してしまいそうです。

集落の春祭りは毎年3月の最終土曜日と決まっています。以前は末日でしたが、神輿の担ぎ手がサラリーマンばかりとなって、曜日制に。やがて、獅子舞を踊る子供が減少して、神社での祭礼のみとなって幾久しく。町会長が交代するので、自分の最後は神輿を出したいと現職の思いで、久々に神社から向かいの集落会館まで神輿ができました。

我が集落の春祭りは決まって雨。まだ春には少しだけ遠い3月末日では時に凍えるような寒さの中で獅子を舞い、神輿を担いだものです。ところが、今年は快晴。穏やかなほんとうに善い日でした。未だ幾分新しさが残る会館の畳に斜めに差し込む早春の夕陽と、神具の長い陰を眺めながら、昔話に花を咲かせる民人たち。

見やれば皆、歳を重ねたものです。50代が少なくない我が集落は未だマシな方ですが、若い衆が家から居なくなる。新しい世代が誕生しない。一年一年確実に歳が往き、まるで真綿で首を絞められるかのように、老いていく集落。

春の陽が穏やかであるほど、現実とのコントラストが際立ち、物悲しくも感じられました。

人が多ければよいというものでもありません。限界集落とは、高齢化率で計るものではなく、自分の事しか考えられない人の割合だと考えています。今一度、何かをシカケる時期なのかもしれません。そのためにも、自らを元気付けなければ！！（は）



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆
していただいている川畠さん
が「能登の夜市」の姉妹店を
開店されました。

上京された際、ご利用になっ
てみてください。

もちろん、川畠さんご自身も
お店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00～24:00

金曜17:00～28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3

ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術
者を育てることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、
計画マンがどのようなことを考えているのか
などに触れて、少しでも業界を知っていただ
ければと考えて編集しています。

2017/04

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2017/04

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

卯 月



兼六園にて
by hama

寄稿 『体と心の生活習慣病』その五

麻田総合病院・糖尿病センター 井垣 俊郎

十年前、立て続けに起きた二つ目の出来事は、私くらいの五十五歳になれば誰しも経験する事でしょうが、同級生の志なかなばにしての早逝でした。あまり個人的な話はどうかと思いましたが、彼が私にとつてどんな存在であったのかを知っていただきたために、一つだけエピソードにお付き合いください。

大病院で一年間の研修を終え、高松に帰って総合病院で研修医生活を始めてから二年目の事でした。何事もそうでしょうが、三年くらいやると何となくできるような気になってしまつ、そんな時期です。夏の夜に当直をしていると、真夜中近くに守衛さんから電話が入りました。若い男性が、当直医は井垣のはずだから、とにかく話がしたいと言つて守衛室の前を動かさない、名前は名乗らない、という内容でした。状態の良くない方が入院していたので、その方の家族かと思つて行つてみると、高校の山岳部で同期だったMでした。Mは北海道で高校の教師をしていましたが、夏休みで帰省して同窓会(私も誘われていたのですが、当直の代わりが見つからず行けませんでしたが)があつて飲んだ帰りがつたようです。高校の山岳部というところは、勝敗やレギュラーの座を争つわけでもなく、良い意味では各人に任されている、逆に言えばメンバー次第で厳しくも生ゆるくもなります。我々の学年は偶然にも私の強いメンバーが揃つて、毎日張り合つたように厳しい練習をして、そして奇妙というか当然というべきか全員が新田次郎の「孤高の人」を愛読する、そんな仲間達でした。その

中でもMは、体力的にも精神的にも頭一つ抜けた存在で、北海道大学に進んだのちも山岳部を続けて、年の三分の一は山に入るといふ学生生活を過ごしたそうです。そして私が二年浪人した末に医学部合格を果たした時、祝いの一言を告げるためだけに金沢まで来てくれた、そんな人間でした。

Mは酔つたふりをして徐々に話をしに來たわけですが、すぐに私は後ろめたさを感じ始めました。言葉の端々に力が漲っているMに比べ、チャホヤされ停滞して緩んでいる自分を感じたからです。Mにも、直ぐ判つたのだと思います。「お前、ダメやな。そんなんで良いのか。会いに來たのは無駄やつた。俺は帰る。」

私は、父親に叱られたのかと思いました。私が父親を高校三年の時に亡くした事はMも知っていますから、敢えてそんな言い方をしたのかも知れません。この夜のおかげで、もう一度ひたむきに取り組みようになり、その過程の中で、見過ごしていた糖尿病の奥深さに気がつき、専門にする道を選びました。

そんなMは、僻地や問題校を転々としながら、手を抜く事も信念を曲げる事もせず生徒に接し続け、過労から鬱病になり、四十五歳で不整脈のため突然死しました。

次回から、糖尿病を中心とした生活習慣病を私がどう考えて何をしているのか、具体的な話に入りたいと思います。



【プロフィール】

(いがき としお) 金沢大学北
濱寮で、濱さんの2年後輩で
した。濱さんは、とつても怖
かった…。卒業後は金沢を離
れ、現在は温暖な讃岐高松で
又ク又クしています。

濱のつぶやき 『賢い人(三)』

サピエンスが、他の人類と異なり地球上を支配していった理由は、唯一つ「妄想力・想像力」だったという。

想像力は、創造の源泉である。逆に言えば、思いも寄らないことは、作り産み出すことはできない。これにはにもモノの生産だけのことに限らない。自分の本業だと、新しい事業を興すこと・新しい取組(イベント等も含む)を始めることは、経験値から想像ができるならば組み立てることはできる。しかし、全く予想もつかない領域はその道の専門家と協働する方が、確実だ。いずれにしてもクライアントは全く未知の世界で、創造も想像もつかないからお呼びを掛けて頂いている。

想像がつかないと、人は不安になる。それもまた、広い意味で想像が働き、色々な注文・意見・指摘が沸き起こる。それらに対して一つ一つ丁寧に解きほぐしていく過程もまた、起業の重要なステップになる。平たく言つてしまえば、未知なる人に不安を与えずに仕事ができれば、こちらもラクだし先方も精神的にラクである。つまりは、篤い信頼関係を築くことに尽きるのだが、現場で次々と起きてくる現象の始末に追われるばかりで、これを体得するまでに恥ずか

しながら相当の時間を要した。
さて果たして、思いも寄らないことは、生み出すことができるというのは、モノ・コトだけだろうか。実は少なくとも、もう一つあると感している。それは、「人との共感」である。

随分と時間が経つて後、重い口を開いて過去の想いを聞かせていただく機会があった。ほんとうに驚いた。その時、自分には到底想像のカケラも及ばないことを先方は抱いておられた。こんなとき、自分の価値基準で、相手の思いへの感情が湧く。良いと思われる基準を超えていれば嬉しく、悪い基準を超えていると哀しいか、ときに戸惑つてしまふのだろう。

無意識に貯えた価値基準によって自分が見(解釈)している世界が全てだ。それを超える地平線のかなたは見えないから、判らないし、それと気づくこともない。しかし、周りの人は自分とは全く異なる地平線とその内側の世界を見ている。そして、それらは語り合い・共有しようとする努力し続けなければ、ただ一人ぼつちの世界に過ぎない。

永く、世間話は無駄話と感じていた。一方で、人を理解するには根気強い会話が欠かせないことをようやく自覚し始めてきた。

これもまた、我々サピエンス独自の能力であり、その故の悩み・楽しみなのだと思う。

うちの竹やぶの中に、ケヤキの木が二本生えている。頭を竹の上に出し、遠くからもよく見える大きな樹だ。北側の一本は南側に比べて一回り太く、葉が落ちてから新芽が一斉に芽吹くまでは、扇型の樹形が青空高くそびえたつ。

先月半ば、材木屋が軽トラで訪ねて来た。ケヤキを切らせて欲しいと言う。近くで最近、家主の手に負えなくなった大きなケヤキを切らせていただいたと言う。“特に困っていない。どうせ二束三文でしょ”と伝えると、見積りだけでも、と。

関係者の気持ちは次の通り。

1.ケヤキは私が生まれる前から竹やぶとともにあり、子供の頃は折れて落ちた枝でよく遊んだものだ。愛着は確かにあるが、未来永劫大切にせねばと言うほどの思い入れはない。ただ、我が家を知らない何人かには「長屋街道から大きなケヤキが見えるところの家」と言うだけでうちが特定されるなど、私の知らないところでこのケヤキはそれなりの存在感を放っているようだ。このことは、密かに誇らしく感じている。

一方、私にとって、ケヤキがあって困ることはあまりないと思う。

逆に、伐採するとなれば周辺の竹を相応に伐らないといけないことが、少々気になるところ。

2.小学生の頃、今回と同じような話を父に聞かされたことがある。それなりの金額を提示されたが、祖父は首を縦に振らなかったらしい。ご先祖様の意向はそういうことだろう。

3.南側の隣家からは、特に小さい方の一本について、落葉の迷惑と倒壊した場合の被害の懸念を、この一件に絡めて、強い言葉で直接伝えられている。どうやら私の留守中に、材木屋と会話を交わしているようだ。これまた意向は明確である。まずは、現在の迷惑の程度と、万が一の際の被害の可能性を見極めておきたいところ。

あとは値付け。

ケヤキの購入代金を、伐り出し作業に要する費用が上回れば論外。たぶんこれがメインシナリオ。隣家のためにお金をかけて伐る気は基本的にない。ただし、迷惑と被害が想像以上の状態であるならしょうがないとも思う。一方で、望外の値が付くなら喜んで伐ってもらおうと思っているが、どのあたりが相場なのかも実はよくわかっていない。

果たして、どのくらいの値段になるのだろうか。今月中には私の立ち会いのもと、ケヤキの大きさや質に関する調査をしてもらおう予定だ。見積りを頂いた上で、何らかの結論を出したい。

先月に続き、印象的だった料理人たちをご紹介します。

3人目は和食板前のHさんです。Hさんは沖縄出身だけあって陽気かつ酒が大好きな男でした。ただ難点は私以外のスタッフに対しては威嚇的な態度をとってしまいがちで、見えないところで業者との癒着をしていることでした。最初の頃は私と定期的に打ち合わせをし本当によく働いてくれましたし、結果も出してくれました。私がそこで安心してしまったのが一番の問題なのですが、完全に任せきりになってしまい、つまり店を放置状態にしてしまったのです。結果、互いの意思疎通が薄れ、スタッフ間で不満が出始め、業者と不正取引をし、店も結果も出なくなり私との関係性がギクシャクし、解雇通知、そして労働審判という流れになってしまいました。この一連の出来事で私も一気に白髪が増えました(笑)が、今の私の人財マネジメントに大きな影響を与えてくれたという点では忘れられない料理人であります。

最後に紹介するのは和食板前のAさんです。Aさんは私が事業継承した蕎麦屋を苦しかった時期からずっと支えてくれた料理人です。イメージする下町の江戸っ子よりも、江戸っ子な男で早とちりや、ちょっとした事でかっとなる喧嘩っ早いところがあるのですが、若い子の面倒見が良く、兄貴肌の人間味あふれた好漢でした。彼は中学卒業と同時に料理の世界に飛び込み、わずか20歳で自分の店を立ち上げました。時代はバブル真っ盛りで、随分といい思い出もしたらしいのですがいくつかの不運が相次いだのと、バブル崩壊の影響でお店はつぶれ、ご家族の借金も抱えマイナスからの再スタートを余儀なくされたようです。そこからフグ料理と和食のスキルを身に付け腕一本とその人間性で数々の名店で重宝されてきました。当社では長く一緒に働きましたが、同居するお母様の認知症が悪化してしまい、自宅近くに職場を移したいと懇願され退職することになりました。今は自宅近くの有名な寿司懐石のお店で副料理長として活躍されています。

『くせが強い』というのがこの世界で生きる人々への感想です。このくせの強さは元来そういう資質の方が選択しやすい職種ということもあるのですが、それに輪をかけてこの世界で生きていく中で醸成されていく要因もあるのだと思います。

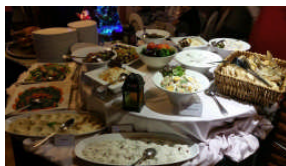
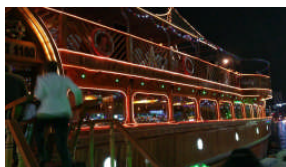
- ・まず料理人世界は徒弟制度が色濃く残っており、和食の職人だと一端になるまでに時間と精神的・肉体的ストレスが相当かかります。
- ・単純にスキルが評価される実力世界であり、人がいい奴はうまく利用されるだけというケースが多々あること。
- ・そして朝から晩まで労働時間は長く、料理長クラスにならないと満足いく給与がもらえない。先日うちでヘルプに入ってもらった老舗和食で働く妻子もいる32歳の料理人は週6日朝から深夜まで働いて手取りが20万円に満たないようです。うちに転職すれば？と聞くと「まだ入れてもらった料理長に恩返しが出来ていないので」と言っていました。サラリーマンとして3度転職してステップアップしてきた自分には想像すらできなかった返答でした。

このような料理人独特の世界は正直今の若者にとっては居心地がいいものではないでしょう。人手不足に輪をかけて、料理人不足が深刻な状況にあります。『和食』が世界に認められた今、それを担うべき人財が輩出されにくい環境はどうなのでしょう？また働き方改革案が大詰めを迎えています。総論としては賛成なのですが、各論では本当に経営者としてこれで事業が成り立つのか？この料理人という世界においてはそれが正しい方向なのか？とついついあれこれ悩んでしまうこの頃です。

『富士の国から ~大魔神のたび~』ドバイへの旅 2016.12.23~28
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

ようやく出港、そしてビュッフェスタイルの料理の提供も。料理は美味しくない。その代わりクreek沿いの街並みはライトアップされ美しかったし、行き交う電飾された船を見るのも楽しくはあった。船内では女性ボーカルのクリスマスソング、駒のように回るアラビアのダンス、スーフィーダンスと呼ばれる伝統舞踊のアトラクションはいずれも良かった。特にスーフィーダンスには驚いた。カラフルな大きな傘のようなスカートをもとに、太鼓やラッパの音楽にあわせてくるくると激しく回る。本来はイスラム教の一派であるスーフィズムの宗教行為で、回り続けることで一種のトランス状態になることによって神と一体化になることを理想としていたとのこと。ただ回るだけではなくて二重になっているスカート一枚を頭の上で回し、キノコのようになったり、電飾でキラキラ光ったりで、そのパフォーマンスに驚きっぱなしだった。そして最後は、スカートを丸め赤ちゃんを抱っこしたポーズとなる。2時間で下船、ホテルに送ってもらい、その後は速やかに就寝した。翌日のホテルの朝食はビュッフェ形式で美味しいものが多かった。

2日目は「初めてのドバイにぴったり！日本語ガイドと巡る充実プラン、往復ホテル送迎付」ツアーからだ。9:30にスリランカ人のチャビーさんがホテルに迎えに来た。日本語堪能、他にもドイツ語、英語もオッケー、1994年からドバイ在住とのこと。次女と二人だけ、他にお客はいない。ラッキーである。まずは世界が認める最上級リゾートホテルであるブルジュ・アル・アラブを眺めることができるジュメイラビーチに到着。このブルジュ・アル・アラブ、5つ星を超え『7つ星ホテル』と呼ばれ、世界唯一の最高ランクホテル高級ホテルチェーンのジュメイラ・インターナショナルが所有・運営を行っている。ペルシャ湾に面する砂浜から280m離れた海上に造られた人工島にあり、橋でつながっている。高さは328mで、ダウ船(アラビアの船の一つ)の帆を模してデザインされており、建物の影がリゾート海岸にかからない様に配慮されている。設計はイギリスのアトキンス社。全202室が全てメゾネットタイプで宿泊料金は、1人最低15万円最高250万円とのこと。建物上部にある円形のヘリパッドは、ゴルフ練習場や貸切のテニスコートにもなり、ヘリパッドからのチェックイン、チェックアウトも



可能。ジュメイラビーチはシャワー設備もあり海水浴もできるが、本ツアーにはそのような時間はない。砂浜に絵模様が着いていて不思議に思うと、目の先に動くローラー車が版画の如く模様を産み出していた。

次に向かうはジュメイラモスク、内部の見学は本コースに入っておらず残念。青空に白いドームと2本の尖塔が映え美しい。次はドバイ博物館、この日は休日で大にぎわい。我々が入館を待っている間にガイドがチケットを買ってくれ、時間ロスなく中に入る。昔の暮らしから今のドバイにいたる時代の流れが展示されている。ガイドの案内があるから、分かりやすかった。

ここで、「砂と油しかないドバイ」がここまでになったのかに触れてみよう。溢れるオイルマネーを使ってこうなっているんだろうと思っていたが、それは違う。国づくりのドラマがある。ドバイ博物館で見た写真にあるように、わずか50年ばかり前の姿は砂色の壁ばかりが目立ち、海辺に住むごく一部の漁民と、大部分を占めるベドウィン族(北アフリカの砂漠に住むアラビア語を話す遊牧民の総称。アラビア語でバドゥすなわち「町以外に住む人」の意。大部分は牧畜を行ない、冬の雨季には砂漠、夏の乾季には泉や川の近くに移動する。)が暮らす場所だった。デーツ(なつめやし)、天然真珠が交易物、でも日本の養殖真珠が世界に出回るとたちまち真珠はダメ、今のお金持ちの国というイメージには程遠い。第二次世界大戦が終結し、20世紀後半に迫った頃、第八代首長ラーシドが、1959年のクウェートからの借金をもとにドバイ・クreekの浚渫工事を実施し、中継貿易港としての基礎固めに成功して、以後の大発展の基礎を築いた。63年にはドバイ空港を完成させた。当時ドバイにあった車の台数を上回る600台の駐車場を設置した。空と海のハブを整備したことが経済政策にスピードをもたらすことになった。国が所有するエミレーツ航空もその着想の一つだ。「ニーズじゃなくトレンド、先の国をつくる」このことをまちづくり思想の根幹に置いている。このことは綾町の伝説の町長・郷田實氏から学んだことでもある。

1958年のアブダビにおける油田の発見に続く、1966年のドバイ沖の海底油田発見はこの動きに大きな力を与えた。1971年のイギリス軍のスエズ以東からの撤退に伴って、同年12月2日、他の6の首長国とともにアラブ首長国連邦をこの地に結成。原油依存経済からの脱却の取り組みと産業の多角化を進めてゆく。その流れのうで1981年に開設に至った経済特区と大型港湾、およびエミレーツ航空の就航開始は、国外資本や外国企業の進出とあわせて『人』と『物』の集積地としての発展を急速に促していった。首長ラーシドは、かつて反対派の人間にこう言った。「私は50年先を見ている。お金を銀行に眠らせておいて何になる。20年後に着手したら、今の2倍、3倍の費用がかかるではないか」それは、明日をも知れぬ砂漠の民の「やれるうちにやっておく」という精神の賜物かもしれない。けど、石油以外のビジネスの基盤をつくった功績は計り知れない。(つづく)

